

「はばたき21」
講座レポート

「はばたき21」では、男女平等参画社会の実現に向けて、様々なテーマを扱った講座を実施しています。

男性学の視点から
「新しい男性の生き方」を考える

■日時：2024年1月27日(土)10:00～11:30
■講師：田中 俊之 さん
(大妻女子大学人間関係学部准教授)



男性が男性であるがゆえに抱える悩みや葛藤を対象とした「男性学」。男性という性別が男性の生き方に与える影響について考えることで見えてくる様々な問題などを、とてもわかりやすく解説してくださいました。

男性が抱える一番の問題としてあげられたのが「働きすぎ」。自殺や過労死といった男性問題にもつながるこの課題が長年解決されずにいるのは、「男性が働くのは当たり前」というアンコンシャス・バイアス(無意識の思い込み)が社会に存在し、深刻な問題として認識されていないからではないかという指摘がありました。

また、男らしさに関して、トクシク・マスキュリニティ(自他を害する過剰な男らしさへの執着)にふれ、競争を勝ち抜くことだけで男らしさを証明しようとするのが、他者とのコミュニケーションを閉ざし、男らしさの呪縛によって自らもストレスを抱えてしまう危険性について語られました。

さらに、今なお根深い職場・家庭における性別役割分業の影響や、妊娠・出産をめぐる男女平等の理想と現実などに関する数々の事例からは、人を男性・女性の二つに分け、こうあるべきと決めつけてしまうことで生じる様々な不自由が浮かび上がりました。

では、誰もが自由に生きられる社会の実現のためにはどうすればよいのでしょうか？ 男性も、トクシク・マスキュリニティではなく、ケアリング・マスキュリニティ(支配を拒否し、肯定的感情、相互依存、関係性などのケア特性に関連づけられる価値を受け入れる男性アイデンティティ)を育んでいくこと。そして、消極的寛容(無関心)ではなく、積極的寛容(自分とは異なる価値観を持つ人々への敬意と開放性)に基づいた「やさしさ」の価値が理解され、人々に浸透することが大切というお話があり、男性の生き方だけでなく、多様性を認め合う男女平等参画社会について考えるうえでも、数々のヒントをいただきました。

みんなが幸せになるために、男女平等参画を進めることが大切だと思いました。

参加者の声

積極的寛容を心に刻んだやさしさを持って、社会とかがかかっていこうと心に決めました。



気になる
数字

29.9%

この数字は、東京都が実施した痴漢被害に関する実態調査で、「これまでに痴漢にあったことがある」

と回答した人の割合です。

東京都が昨年公表した調査結果によると、有効な回答があった8284人のうち、これまでに痴漢被害にあったことがある16歳から69歳は2475人で、29.9%に上りました。調査報告書によると…

◆直近の被害場所
・電車内81.2%、路上7.9%、駅構内4.9%の順で多い。

◆痴漢被害にあったとき(電車内)
・我慢した、何もできなかった 40.7%
・被害者が行った対応により痴漢が止まった 71.7%
・周囲の人が助けてくれた 56.1%
・周囲の人が行った対応により痴漢が止まった 92.7%

◆痴漢目撃/居合わせ経験(電車内 ※は電車内・駅構内)
・目撃/居合わせた経験あり 11.2%※
・目撃/居合わせた際、具体的な行動をとらなかった 49.1%
・何かしらの行動をしたとき痴漢が止まった 80.0%

痴漢被害率(場所を問わず)内訳

	被害者(人)	母数(人)	遭遇率
全体	2,475	8,284	29.9%
男性	298	3,474	8.6%
女性	2,156	4,750	45.4%
Xジェンダー/ ノンバイナリー	20	56	35.7%
その他	1	4	25.0%

周囲の人が痴漢を防ぐ

出典
『令和5年度
痴漢被害実態把握調査報告書』
※調査報告書の詳細は、東京都の都民安全推進部のホームページに掲載

開催!

2023
みんなのはばたき21 フォーラム
～多様性を認め、共に助け合うまち“たいとう”～

- 2023年9月24日(日)
フォーラム講演会
- 2023年9月23日(土)・24日(日)
男女平等推進団体による
ワークショップ & 作品展示

講演会

親子三代みんなで子育て
～これが木久蔵流～

【講師】林家木久蔵 さん

講演会タイトルにある「親子三代」とは、父であり師匠でもある林家木久蔵さんと木久蔵さん、そして自身のお子さんたちのこと。三代にわたる子育てに関する体験などを、落語家ならではのエピソードを交えて、ユーモアたっぷりにお話ししていただきました。

木久蔵さんの幼少期。人気テレビ番組でみせる木久蔵さんの奔放なキャラクターのため、学校ではからかわれることもあったとか。しかし家庭では、何げない日々の幸せと楽しみを大切にしている父親だったそうで、干物のアジの眼がこわいと言う木久蔵さんのために、紙で作ったメガネをアジにかけてくれたことなど、ほのぼのとした思い出話が続きました。

入門して師匠と弟子の関係が加わっても、育て方として共通していたのが「礼儀・マナーを重んじる」「食べ物を大事にする」「ものおじしない」という三つのこと。これらは、木久蔵さんのお子さんたちへの教育にも受け継がれており、田植えや稲刈り、釣りなどにいっしょに出かけて楽しみながら、他の大人たちとの交流の機会も作っているそうです。

落語の実演は、父母と子とのやりとりをユーモラスにつづる「初天神(はつてんじん)」。上記の三方針につながる内容が描かれていて、講演会のテーマにすばらしいオチがつけました。



街で感じる 男女平等参画

台東区の特徴の一つが「演芸の街」であることです。落語、講談、浪曲、漫才、コントなどの娯楽を観られる寄席や劇場がたくさんあります。

長く男性中心だった演芸の世界ですが、この数十年、女性芸人の躍進はめざましく、様々な舞台で芸を披露しています。例えば、女性落語家はまだ1割に満たないとはいえ、数も実力も急上昇中。2023年には、浅草演芸ホールで、史上初の女性演者だけによる興行がありました。

また、講談師や浪曲師は、現在半数以上を女性が占めており、木馬亭には101歳で現役の曲師(浪曲の三味線奏者)が登場します。

演芸の街で感じるこの気運、台東区における「女性活躍」の一例といえるかもしれません。

